怜悧なエリート外交官の容赦ない溺愛

季邑えり
Eri Kimura

Eternity
BUNKO

目次

怜悧なエリート外交官の容赦ない溺愛 5

書き下ろし番外編
素敵な名前の子どもたち 327

怜悧なエリート外交官の容赦ない溺愛

プロローグ

ベッドの上で聞いた彼の掠れた声が、まだ耳に残っている。

「美玲、出張から帰ってきたら……ここに指輪をはめさせて」

トクリと高鳴る胸の鼓動。後ろから巻きつく腕が、何も身につけていない身体を引き寄せた。ゆうべ、激しく重ねた身体を労わるように、優しく触れた指先が左手の薬指をなぞっている。

初めて出会ったのは内戦中の国だった。あの時からいろいろあったけれど、今は彼――一三条誠治の愛に包まれている。

少し目尻の下がった涼やかな瞳に、形の整った眉。外国人かと見紛うほど高い鼻梁に、肉厚の唇。見る人全てを魅了する極上の容姿のおかげで、上背があるのに威圧感を与えない。

誠実さの塊のような彼は微笑みを絶やさず、優しさと甘さのある顔立ちをしている。それなのに、同僚からは『冷静で冷酷な外交官』と呼ばれている。

そんな彼からプロポーズめいたことを囁かれた美玲は、心を歓喜で震わせつつこくんと頷く。

「こっち向いて、美玲」

細身でありながら、彼の身体はしっかりと筋肉がついている。誠治が少し力を込めると、美玲の身体はベッドの中で反転した。

すぐ傍にある誠治の身体に、裸の胸が触れてしまう。スリムなのに人よりも大きめな膨らみの先端は、寝起きにもかかわらず尖っていた。柔らかい朝の日差しの中で、誠治の跳ね気味の黒髪が光を受けている。

「プロポーズの予約。してもいいかな」

「……うん」

日本で最も優秀な人が集まる大学を出て、キャリア官僚の道を突き進む彼。賢いだけでなく、人を惹きつける魅力に溢れている。外国語だって英語だけでなく、フランス語やアラビア語まで習得している秀才だ。

そんな彼からの真摯な言葉に胸が弾む。その一方で、美玲の心の中にはいつもの疑問がひょっこりと芽を出した。

――こんな私が、彼の隣にいてもいいの？

美玲の揺れる眼差しに不安の色を見つけたのか、誠治はこつんと額と額をくっつけた。

「こら、また美玲は自信をなくしているのか？　あれだけ言っただろう？　僕が好きなのは、そのままの美玲だよって」

「……うん」

胸の奥がじわりと温かくなる。つい、自分のことを卑下しがちだけれど、いつも誠治の言葉が呪縛を解いてくれた。もっと、自分に自信を持っていい。彼の傍にいてもいい。彼を――愛してもいい。

「美玲、愛しているよ」

熱い吐息と共に、彼の唇が下りてくる。ゆうべも腫れるかと思うほどに貪られた唇を優しく食まれた。唇の裏側の柔らかい部分を重ねあうようにキスをしていると、熱がうつるように恋情が湧き上がる。

「私も……好き」

泣きたいほどの嬉しさが込み上げてくる。力強い腕に抱きしめられ、真新しいシーツに美玲の柔らかい髪が流れていく。後頭部に回された手が、キスをしている間中髪を梳くように撫でていた。

こんなにもおだやかで眩しい朝を二人で迎えるなんて――美玲の身体を焼き尽くすような喜びが胸の内に膨れ上がる。

美玲はこの後崖から突き落とされ、転がり落ちることも知らずに、幸せの絶頂にいた。

橋渡美玲は、紅茶にミルクを落としたような色の柔らかい髪をふわりと片方の肩に流した。父親がアジア系のフランス人のため、日本人女性の平均よりは少し高めの背にスリムな身体つきをしている。よく目力があると言われる、彫りの深い顔をしているけれど……美玲は鏡に映る自分の顔があまり好きではない。

中学生になる頃に両親が離婚をし、生まれ育ったフランスから母親と日本に帰国した。その途端――周囲から浮いてしまった外見にコンプレックスを持ちはじめる。

美女と言われ、恋愛に奔放な母に容姿が似ている自分。なるべく目立たないように、息を潜めて生きてきた。外見と中身が違うと言われるほど、美玲は引っ込み思案な性格だった。少なくとも、誠治に会うまでは――

結局その日の朝は、誠治がフランスに出張する時間ギリギリまで抱きあっていた。今回はたった二週間の出張なのに、名残惜しいとばかりに肌を合わせ胸元に赤く散る痕を残された。太ももの内側にまでつけられた所有印を見ると、彼の独占欲を感じて嬉しくなるのだから、美玲も随分と浮かれている。

出発の時刻になってしまい、慌ただしくキスをしてからホテルを出る。美玲は仕事のスケジュールを思い出していた。

「誠治さんが帰国する日は休みだから、空港まで迎えに行こうかな」

一緒にいられるなら、ずっと傍にいたい。少し遠出になるけれど、誠治と過ごせるなら構わなかった。けれど、彼から返ってきた言葉は期待とは少し違ったものだった。

「それは……悪いけど必要ないよ」

「そうなの？」

「ああ、海外出張は頻繁にあるから気にしないでほしい。それに、帰国したらすぐに仕事に取りかかるから、移動時間も資料を読むために使っている」

そこまで言われてしまうと、美玲は何も言えなくなる。

誠治は外交官は公僕――国に仕える身分だからと、仕事のことに関しては恐ろしいほどに冷静で私情を挟まない。彼のそんなクールなところも好きな美玲は、誠治を信頼しきっていた。

「気をつけてね。時差もあるだろうし、連絡はいつでもいいから」

「すまない。出張中は気を張ることが多いから、頻繁にメッセージもできないと思うけど……待っていてほしい」

「うん」

それぞれの家に向かう交差点で別れると、美玲は颯爽と歩く誠治の後ろ姿を眺めた。本当はいつでも一緒に過ごしていたい。海外に行って離れていた彼を、空港で「おかえりなさい」と迎えたかった。

――でも、プロポーズの予約って、言ってくれたから。

彼が帰国すればすぐに結婚に向けて動き出す。込み上げてくる嬉しさのあまり、風船のようにふわふわと浮かれた気分で、美玲は自宅のアパートに向かった。

◆

それから二週間。

「今度はハロウィンかぁ」

流暢なフランス語の会話力を生かして外国語スクールの教師をしている美玲は、イベント準備のための買い出しをしていた。いかにも怖そうなお化けや魔女のコスプレなど、毎年恒例の季節行事。

郊外にある大型ショッピングモールに、ハロウィン用の飾りがたくさん売っていると聞き、気分転換を兼ねてやって来たけれど……子ども連れの家族の多さに、独身の美玲は驚いた。

普段は都心で買い物をすることが多いから、ここに来るのは久しぶりだ。ふらりとウィンドーショッピングをしながら目的の店を探していると、反対側の通路を見知った顔が横切り美玲は振り返った。

――え？　帰国するのは明日のはずなのに……どうして？

誠治と思しき男性が歩いている。まさか、と二度見するけれど、あの後ろ姿はやはり彼に違いない。

長い脚に濃いブルーのデニムパンツを穿き、ブラックのツイードジャケットの下には白のタートルネックのカットソー。普段よりもカジュアルな装いをしている。それだけでなく、隣には黒髪の美しい女性と……二歳ぐらいの男の子がいた。

――まさか！

ドクン、ドクンと心臓が嫌な音を立てている。さっきまで聞こえていた、ざわつくフロアの音が静まり、彼の姿がスローモーションのように流れていく。音のない景色の中で、誠治が隣に歩く子どもを抱き上げて微笑んだ。

美玲は呼吸を止めた。

彼が抱き上げている子どもは、誠治にそっくりだ。二重の目も、形の良い眉も。いかにも賢そうな顔がよく似ている。

「なんで……」

疑問が頭の中をぐるぐると回っている。彼は一人っ子だから甥ではないし、どう見ても仲の良い親子にしか見えない。ぐずっていた子どもは、誠治に抱き上げられた途端、きゃっきゃとはしゃいでいる。

隣にいる女性は、鮮やかな紅色のワンピースを優雅に着こなし、幸せそうに微笑んでいた。

黒目の大きな顔立ちの彼女とは、以前一度だけ会ったことがある。

――あの女性は！　誠治さんの婚約者だと言っていた……！

日本人形のように白い肌に漆黒の細くまっすぐな髪。一重で切れ長の目に小さな唇。品のある佇まいは、日本の美を思い起こさせた。

いつか大使となる外交官の妻であれば、自分とは違い東洋系の美人の方がいいに違いない。そんな劣等感を抱かせるのに十分な美しさを持つ彼女に嫉妬していた。だから――

「誠治さん……うそ」

彼からは誰とも長く付き合ったことはないと聞いていたけれど、彼女は自分のことを誠治の婚約者だと言っていた。長いまつ毛を伏せ、清らかに微笑む姿を思い出しては悲しくなり、やはり自分はふさわしくないのかと苦しんだから、見間違えることはない。

誠治の隣に立つ彼女は――外交官の伴侶となるのにふさわしい気品を兼ね備えた、理想的な妻そのもの。

そして、誠治と似ている子どもが一緒にいる。やはり、彼の母親から聞いた話は本当だった。

ほんの少し前まで、誠治と結婚する未来を夢見ていたのに。現実を目の前にして、美

玲の足は震えてしまう。通り過ぎていく彼らの後を追いかけたいのに、まるで床に接着剤で留められたかのように足が動かない。

「あなた、大丈夫？　お顔が真っ青よ」

通りすがりの女性に声をかけられ、美玲はハッとして鞄を持ち直した。

「いえ……大丈夫です」

女性にそう答えると、まずは傍にあったベンチに腰かける。そして彼らのいた方向を見ると、どうやらフードコートのある場所に向かっているようだ。

――あ、行っちゃう……

彼の二股を目の前にしても、声をかける勇気が出てこない。

テレビドラマのように彼を糾弾（きゅうだん）するなんて、とてもできそうにない。何より子どもの目の前で言い争うことは、美玲には無理だった。

三人の姿が人込みの中に入っていく。現実とは思えない彼の裏切りに、美玲の心はナイフで切り刻まれたように血を流す。――痛い。痛くてたまらない。

呆然としていたあまり、美玲は後に、どうやって家に帰ったのかを思い出せなかった。

第一章

美玲と誠治はアフリカで出会った。

当時大学を卒業したばかりの美玲は得意の語学力を生かして、国際的な非営利団体の職員をしていた。

医療を専門とする団体は、どんな国であっても草の根の支援を絶やさない。以前からそんな世界に興味のあった美玲は、学生時代からボランティア活動をしていた。

内向きになりがちな自分を変えたくて頑張ったことが功を奏し、職員にならないかと声をかけられたのだ。

さらにはフランス語が流暢なことから、医療職をサポートするスタッフの一人としてアフリカに派遣された。

政情は不安定ながら、比較的落ち着いている地域と説明を受けていたけれど……美玲が派遣されて二年、内戦が一気に加速する。

「先生っ、大使館から連絡が来ました。邦人は退避するようにって」

団体の運営する診療所は北部にあるため、まだ静かだった。だが、南部にある都市は反政府組織が実効支配しつつある。

停電や断水が続き、日常生活を送ることも困難になってきた。何よりも、日本人が戦闘に巻き込まれてしまうと国際問題になりかねない。

美玲の場合、成人した時に日本の国籍を選んだといっても、以前はフランス国籍を持っていたから余計ややこしい。

一緒に働く医師の藤崎（ふじさき）は眉間に皺（しわ）を寄せた。彼は勤務していた病院を早期に引退し、ボランティア精神からアフリカの医療を支えるため、かれこれ五年もこの地に住んでいる。診療所への思いも美玲より強いに違いない。

髪に白い色が交じっているが、まだまだ体力も気力もある人だ。けれど、事態は一刻を争う。

「ここも戦闘地域になりかねないと。退避のため、自衛隊も国連も動いているようです」

「わかった。美玲君、荷物をまとめるんだ」

「はい」

こんなこともあろうかと、美玲はすでに準備をしていた。４ＷＤのピックアップ・トラックには水や保存食、ガソリンを積んである。診療所を閉じることになるため、これまで支えてくれた現地スタッフに声をかけた。

『ごめんなさい、ここは一時閉鎖することになったの』

『うん、ミレイとドクターは日本人だからね』

外国人であっても、現地に溶け込めるように努力してきた。けれど、戦闘の危険が迫ると逃げなければいけない。でも、現地スタッフは自分たちと違って逃げる場所がない。

申し訳なさに胸を痛めながらも、自分たちが残り続ければ攻撃の標的にもされかねない。外国人は目立つため、どうしても狙われがちだ。

『ミレイ、これを持っていって』

看護師をしているマリアが、乾燥させたイチジクと木彫りの人形を渡してくれる。イチジクは貴重な甘味なのに。美玲は泣きそうになりつつもグッと彼女の手を握りしめた。

『ありがとう』

元気でね、とか、また会おうね、とか。そうした未来のある言葉をかけられない。彼女たちはこれから、厳しい現実に直面するからだ。

退職金代わりに多めの給料を渡し終えると、藤崎は診療所の扉の鍵をスタッフに渡して車に乗り込んだ。

厳しい目を診療所に向けながら、きっと再びこの地に戻りたいと思っているのだろう。運転手に声をかけ出発する。悪路を進むせいで何度も車が跳ね、そのたびに舌を噛みそうになる。そのうち国道（ハイウェイ）に出た車は、広大な平原が広がる地にまっすぐに延びる道路を走っていく。

車載無線を国連が開設しているバンドに合わせると、各国の退避する様子が流れてくる。時折、砂が入ったようにザラついた音を聞きつつ、美玲は緊張を緩めるように鞄を

手繰り寄せた。

鞄には全世界対応の衛星携帯電話が入っている。停電を繰り返しながらも、この電話の充電だけは欠かさなかった。非常時には情報が命綱となるからだ。

美玲に連絡をくれた日本大使館の人は、一三条と言っていた。会ったことはないけれど、安全確認をしてくれた時の低い声が耳の奥に残っている。

「では、退避対象者は二名でよろしいですか」

「はい。あの、やっぱり国外に避難しないといけないのでしょうか」

「北部は比較的安定していますが、首都をはじめ南部の都市には攻撃がはじまっています。空港も占拠されたため、一刻も早く退避行動をお願いします」

「……そんなことになっているなんて」

都市から離れたところでは、銃声など聞こえてこない。今朝も鶏が元気に鳴いていたから、美玲には深刻な事態が実感できなかった。

「人は危険が迫っていても、危険と思いたくない、というバイアスがどうしてもかかります。おこがましいですが、僕を信じて行動を起こしてください。いつ、橋渡さんのところに攻撃があってもおかしくない状況です」

「でも、ここはまだ静かですよ」

「飛行場にある建物は、連日砲弾を受けています。外国人が残ると、人間の盾として利

用される可能性があります。一刻も早く退避しましょう」

ここまで説得されてようやく、美玲は覚悟を決めた。藤崎も納得してくれるだろう。

「わかりました」

「っ……ありがとう」

一拍置いて、お礼を言われる。心配してもらったこちらがお礼を言うべき場面なのに、人の良さがにじみ出るやり取りに、美玲は安堵する。

彼のいる場所はきっと、美玲たちのいる場所よりも危険が迫っているに違いない。退避するなら、一時停戦をしている三日間の間に動かないといけない。それなのに、のんびりと答える美玲を落ち着いて説得してくれた。

――僕を信じて。

不思議と彼の言葉がすっと心に染み込む。目を閉じると低い声が聞こえてくるようだった。

このまま車で走って集合場所の日本大使館に行けば、彼に会える。こんな非常時にもかかわらず、美玲は一三条と名乗る彼はどんな人なのだろうかと想像した。

語っていた声の感じからは、かなり年上のような気もするし、まだ若い専門官のような気もする。

――どんな人かな……

車窓にはひたすら草原の景色が続いている。時折、小さな町を通り抜けていくけれど、どこもひっそりとして普段のような賑わいは見えない。

某国政府は軍隊の派遣を見送った、と無線から情報が流れてくる。

ここまで来るとさすがに、美玲も事態の深刻さを実感していた。そして、忍耐強く自分を説得してくれた一三条に改めて感謝するのだった。

土埃（つちぼこり）が舞い、直前まで戦闘が行われていた形跡が残る道を進むと、ようやく二人を乗せた車は日本大使館に到着した。首都の建物はところどころ崩壊していて、焼け焦（こ）げた臭いが漂っている。大使館の前面の道路には、大型バスが駐まっていた。

黒い鉄柵のある門のところでパスポートを見せ中に入ると、広場には在留日本人と思しき人々が集まっている。受付の場所を聞いてそこへ向かうと、美玲の耳は聞き覚えのある声を拾った。

「橋渡美玲さんですね、一三条です」

美玲が振り返った先に、背の高い男性が立っている。ドクン、と心臓が跳ねる。――電話で聞いた声だ。

「はじめまして。橋渡です」

医師の藤崎と一緒に到着したことを報告すると、いかにも安堵したように彼は「良かった」と呟いた。白いシャツを腕まくりして額に汗をかいている。想像していたよりもずっと若く、整った容姿をしていた。

一三条は疲れた顔をしながらも、美玲を安心させるように微笑み、手を差し出してくる。

「電話では失礼しました」

「いえ、こちらこそ。あの時はありがとうございました」

強い視線を感じ、美玲は顎を上げると彼と目を合わせて手を伸ばす。ぎゅっと握りしめる大きな手が熱い。アフリカでは当たり前の仕草なのに、なぜか特別に強く握られている気がする。

漆黒の瞳をした彼は、美玲の少し薄い色をした瞳に気がつくと、確認するように声を落とした。

「橋渡さんは、確かフランス国籍を持っていましたね」

「はい、でももう日本国籍を選択しています」

「……わかりました。では、ここからは僕たちが全力で守ります」

意志の強そうな瞳で見つめられ、美玲は耳の奥にトクトクと心臓が速く脈打つ音を聞く。不安な時に、守ってくれるという言葉を聞いたからだと、自分を戒（いまし）めつつも彼から目が離せなくなる。

一三条も同じように、美玲から視線を外さない。

ほんの数秒のはずが、永遠にも思えるほど見つめあっていたけれど——一三条は次々と到着する日本人の対応に呼ばれてしまう。

「では、説明はまた後で」

「はい」

名残惜しそうにしながらも、握手していた手がほどかれる。美玲は心を持っていかれたように、彼の後ろ姿を見つめることしかできなかった。

日本大使館に集まった人々は、国連の主導する退避団に合流することになった。各国の退避メンバーが集まり、何十台もの車が列（コンボイ）になって進むようだ。

車列の先頭や最後、そしてところどころにどこかの国の軍隊が武装して並走する。

日本にいると目にすることのない光景を、美玲は緊張した面持ちで眺めていた。

まさか、こんなことが自分の身に起こるとは思っていなかった。内戦状態といっても、ここ数年武装勢力が攻撃するのは一部の地域に限られ、派遣先はそこからはずっと遠い静かな地域だった。

——しっかりしないとね……

美玲は不安に怯えそうになる気持ちを押し込める。

大使館に集まった人の中には子ども連れの人も、アフリカ人の妻を置いて日本に帰国する人もいた。妻の両親、兄弟姉妹はここにいるため、離れられなかったと聞く。そうした人たちにとって、この退避は心理的にかなり厳しいだろう。

結局、国外退避する日本人は六十名近かった。大型バスは用意されていたが、座席が足りないため美玲たちは乗ってきた車を提供することに決める。

ガソリンは予備の分まで載せているから、港に到着した後は運転手に任せることになる。

「すみませんが、僕も同乗させてもらえますか?」

大使館職員はそれぞれバスや車両に分かれて移動することになり、一三条は美玲の乗る車を希望した。座席は空（あ）いているので、彼が来るのは歓迎だ。

美玲が後部座席に移動すると、一三条が助手席に座る。

「ドクターがいると、安心しますね」

「こんな時は、できないことの方が多いですよ。医療品も最小限しか持っていません。私たちにしてみれば、一三条さんのような外交官の方が頼りですから」

藤崎が朗（ほが）らかに笑うと、自（おの）ずと緊張がほどけていく。一三条は車についているアンテナを見て、「車両無線があるので助かります」と顔を緩めた。

衛星携帯電話の使用は控えるようにと国連からの通達があったため、無線から得られる情報が頼りだ。どこで武装勢力が傍受（ぼうじゅ）しているかわからないため、できる限り情報を

漏らさないように気をつける。

車が走り出すと同時に一三条は無線をつけた。すると騒々しいほどのやり取りが交わされている。英語だけでなく、時折アラビア語でも交信しているが、一三条はその内容も理解しているようだった。

美玲はふと疑問に思ったことを口にした。

「アラビア語がわかるなんて、一三条さんは専門官としてアフリカに来たのですか？」

「いえ、僕は総合で入省しました。今は二等書記官です。……アラビア語は、学生時代に学んでいたから得意なだけですよ。外務省での研修言語はフランス語でした」

「まぁ、そうだったんですね」

アラビア語が堪能なので専門官職員と思われたが、彼は総合職、いわゆるキャリア官僚だった。

外交官には大きく分けて二つある。地域の言語や政情に通じた『専門官』と、将来は大使まで上り詰める『総合職』。

どちらも重要なことに変わりないが、普段であれば美玲がキャリア官僚である一三条に会う機会は殆どない。

無線を使い、一三条は国連職員と連絡を取り合っていた。無線は携帯電話と違い、独特な言い回しが必要だが、それさえも完璧に使いこなしている。

「一三条さんは、なんでもできるんですね。こうした現場を経験されたことがあるのですか？」

「そういうわけでは……ただ、セキュリティ研修を兼ねて自衛隊の訓練を受けたのが役立ちました」

「はぁ、凄いですね」

何事にも動じない雰囲気でありながらも、時折美玲に見せる表情は柔らかい。ピックアップの後部座席に座ったまま、助手席に座る一三条の横顔を飽きることなく見つめてしまう。

辛く、不安になる道のりも彼がいることで不思議と落ち着くことができた。さらに、外交官として優秀な彼は他の国の外交官とも親しく、休憩時間の情報交換を怠らない。

吊り橋効果――危険な状況を一緒に過ごしたことで、相手を好きになってしまうというそれだと思いながらも、美玲の中で一三条の存在が大きくなっていく。

けれど――どれだけ準備していても不測の事態はやってくる。車の異変を感じた運転手は、車列を抜けると道の片側に車を停めた。

「あちゃ～、まいったな」

悪路を走っていたせいか、ピックアップ・トラックのタイヤの一つがパンクしているのを見て藤崎が叫ぶ。

車に乗っていた全員が降りると、砂を含む乾いた風が吹いてきた。周囲は赤茶けた風景が広がるだけで何もない。

幸いにも予備タイヤを載せていたが、交換するために持ち上げるジャッキが見当たらなかった。美玲は呆然と車を眺めることしかできない。

「橋渡さん、ちょっとお願いがあるんだけど」

乾燥した風が吹く中、立ちすくんでいると一三条が美玲に声をかけた。冷静な彼にしては珍しく、額に汗をかいている。

「僕が無線で救援を頼むから、その後のフォローをお願いできるかな」

「フォローって、何をすればいいのですか？」

「無線を聞いて、必要なことがあれば受け答えしてくれたら大丈夫だよ。君なら英語もフランス語もわかるよね」

「はい」

無線で交わされる会話をずっと聞いていたから、理解はできる。でも受け答えとなると、会話に入らないといけない。普段と違い、相手は国連や軍隊の人たちだ。

「大丈夫、電話と違って言葉を短めに。語尾にまだ続く時はオーバー、終わる時はアウト。これができればいい。聞いている限りだと、喋っている人は無線の基本も、アルファベットの伝え方もなってないしね」

「そうですけど……私が話した言葉を、無線で受けている人がみんな聞いているんですよね」

「うん、でも大丈夫。君ならできるよ」

力強い声で励まされると、できそうな気がしてくる。何よりも、今動ける人が動かないと、状況は変わらない。言葉のレベルで言えば、自分の方が藤崎よりも上手だから、一三条も頼んだに違いない。

「わかりました、やってみます」

美玲は助手席側に立つと、無線の通話器の部分を持った。ボタンを押し続けている間は会話に入る、離せば出る、という単純なものだ。

「僕がやるように会話すればいいから」

「はい」

一三条は通話器を持つと、『こちら日本の車両、ナンバーは――車のタイヤがパンクしたから、ジャッキが欲しい。オーバー』と通話を切る。すると受信機から声が聞こえた。

『こちら国連担当、車の位置と車両の色を教えてくれ。オーバー』

『位置は中ほど、車の色は白、ピックアップで右前のタイヤがパンクしている。オーバー』

『わかった。ジャッキを持ってすぐに向かう。予備タイヤはあるか？　オーバー』

『予備タイヤはある。救援を待っている。アウト』

『オーケー、アウト』

通話が終わると、一三条はふぅ、と息を吐いた。救援が来ると聞いて、二人ともホッとしたのか目が合った途端、笑顔になる。

「ほら、簡単だろう？　また話しかけられたら、日本の白のピックアップって答えればいいよ」

「簡単じゃないですよ……でも、頑張ってみます」

顔を上げた美玲は、頑張るぞと気合を入れて両方の手で拳を作る。そんな彼女の仕草が可愛らしく見えたのか、一三条は口元に笑みを浮かべた。

「君ならできるよ」

「はい」

しばらくすると、国連の車両と一緒にイタリア人を乗せた車が到着する。どうやら本職の整備士がいたのか、彼の身振り手振りに従ってジャッキが設置され、あっという間にタイヤの交換が終わった。

その間、無線で話しかけられないかとドキドキしてしまう。藤崎の「できたぞ！」という声を聞き安心したところで、無線から助けを求める声が聞こえた。

『腹痛を訴える人がいるが、医師はいないか？　オーバー』

『国連だ。車列のどのあたりにいる？　病人は一人か？　オーバー』

『一人だ。列の真ん中あたりだ。オーバー』

『今、医務官がいない。これを聞いている者で医師はいないか？　オーバー』

バクバクと心臓が鳴っている。医師である藤崎ならここにいる。美玲は通話器を手に持つと、藤崎に目で合図をする。無線の内容を聞いていた彼は、うん、と大きく頷いた。すーっと息を吸った美玲は、通話器のボタンを押した。

『こちら日本、医師が一人いる。真ん中あたりで、止まっている白のピックアップ。オーバー』

『良かった！　さっき通り過ぎたから、こちらから向かう。オーバー』

『では待っている。アウト』

『すぐに行く。アウト』

通話が終わった途端、美玲は全身の力がふっと抜けてしまう。良かった、と思うと同時にこれから患者が来るのだと気を引き締める。

「先生、今からこちらに向かうようです」

「そうだな。準備をしてくれ」

「はい！」

慣れていない自分でも役立つことができた。安心するとともに、国という垣根を越えて協力しあえることに感動を覚える。

しばらくして到着した車両にいる急病人を見た藤崎は、真剣な表情で水を飲ませ鎮痛剤を渡した。応急処置でしかないが、今の状況ではこれが限界だった。

一連のトラブルが終わった時には、美玲も藤崎も、一三条さえも砂を被ったように服の色が茶色くなっている。

「藤崎先生、顔にまで砂がついていますよ」

「ああ、さっきの砂嵐はひどかったからな」

「そういう一三条さんも、背中が凄いことになっています」

「あっ、え？　そう？」

三人で互いの身体についた砂をはたき落としてから、車に戻る。随分と遅れてしまったけれど、ゆっくりと進む車列だから、すぐに追いつけるだろう。

「橋渡さん、聞いたよ。無線で急患を引き受けたんだってね」

「ええ、緊張したけれど、なんとかなりました」

「やっぱり、君は凄いよ」

そんなことない、と思いつつも一三条に褒められ嬉しくなる。美玲は頬をうっすらと染めるが、危険と隣り合わせの退避中であることに変わりはない。

車列に国連の旗がついていても、ひとたび停戦が破られれば攻撃対象となる。部隊によっては末端まで命令が行き届かないことも往々にしてあった。ひやひやしながらも進

む車列は、幸いにも砲弾を受けることなく進んでいく。

ようやく港にたどり着くと、そこには邦人救助のために飛んできた自衛隊のC2輸送機が到着していた。これで国外に出ることが可能となる。美玲はホッと胸を撫で下ろすけれど、一三条の仕事はむしろこれからだ。連絡や調整のため、まだ留まっている日本人のために彼は危険なこの地に残ると言う。

車を降りる時に、これで最後と思い美玲は思い切って声をかけた。

「一三条さん、ありがとうございました。日本に無事に帰ったら……あの」

「帰ったら、一緒に乾杯しましょう」

一三条も安心したのか、硬い表情を崩して笑顔になる。爽(さわ)やかな微笑みに惹かれるように、美玲も「はい」とはにかみながら返事をした。

帰国したら連絡してほしい、と渡されたのは他の日本人と同じ外務省の番号が書かれたチラシだった。

――これって、他の人にも渡していたものと同じ……

受け取った紙を見た美玲は、はっと顔を上げた。

「わかりました」

ほんの少し期待したけれど、やはり一三条にとって自分は保護すべき邦人の一人に過ぎない。特別なものは何もないと、美玲は走り出しそうになっていた気持ちにブレーキ

をかける。

「それじゃ、また」

一三条は名残惜しそうに挨拶をすると、駆け足で美玲から離れていく。

ほんの短い出会いだったけれど、美玲には忘れられない体験となった。

内戦激化のための国外退避なんて、もう二度と経験したくはないけれど……熱い眼差しを持つ彼、一三条誠治に再び会いたいと思わずにはいられなかった。

第二章

日本に帰国した途端、美玲は疲れを覚えて休んでいた。心身ともに無理がたたったのだろう、心因性のものだからゆっくりと休むようにと医師から言われてしまう。

非営利団体のアフリカでの活動は中断となったため、休養を兼ねて美玲は仕事を辞めることにした。けれど実家に帰ろうにも、母親は自分の知らない男と一緒に暮らしているから近寄りたくない。

藤崎にはしばらく休んだら、再びアフリカを目指そうと誘われたものの、美玲にその気力はなかった。

結局、語学力を生かして美玲は外国語を教えるスクールで働こうと、面接を受けることにした。

『フランス語の他に教えることができる言語はありますか？』

『英語も得意ですが、ビジネス英語はできません』

言語を教える経験を問われ、学生時代に教えていたことを伝える。ネイティブ並みの流暢さから、無事に面接は通り就職が決まった。

美玲は都心にある、働きながら言語を学ぶ人が多い地域に配置された。最初は研修を受け、次第にクラスを受け持つようになる。

働きはじめるとすぐに、受付に座る事務の安斎（あんざい）ちなつから声をかけられた。

「美玲先生、ちなつです。よろしくお願いします。ここは外国人が多いので、名前で呼ぶのが基本ですよ」

「そうなんですね。ちなつさん、よろしくお願いします」

ちなつは背が低く、くりっとした目の可愛らしい人だった。すらりとした手足に、オリエンタルな雰囲気の美玲とは美しさのタイプが違う。意外と人見知りの美玲は、話しかけられた途端に嬉しくなる。

――可愛らしい人だなぁ……

年齢も近い二人はすぐに仲良くなった。どちらもお弁当を持ってきていたので、昼食

はスタッフ控室で食べるようになる。
　ちなつの話題は流行のドラマや音楽についてなど、アフリカにいた時は忘れていたことばかりだ。新鮮な気持ちで聞いていると、頷いてばかりいる美玲にちなつは驚きを隠さない。
「美玲先生って、もしかして流行とかに興味なかった？」
「そんなことないんだけど、二年近くアフリカにいたから、感覚が戻らなくって」
「え！　アフリカに二年もいたの？」
　そこから話が弾み、美玲は半年前の出来事を伝えた。日本でも大きく報道されていたから、ちなつは興味深く聞いてくる。
　美玲も話すことで自分を振り返ることができ、気持ちが整理されていく。
「だから、時々浦島太郎みたいなの。ちなつさんには、いろいろと教えてほしいな」
「はい！」
　実家暮らしのちなつは、母親が未だにお弁当を作っているという。中学生の頃からお弁当は自分で作っていた美玲は違いを感じ、少しだけ心が疼いた。
　けれど、いつものように気持ちに蓋をする。
「そうだ、美玲先生は美人だから、生徒さんとのトラブルには気をつけてくださいね。ストーカーになっちゃう人とかいるので」

「そんなこと、本当にあるんですか？」
「いますよ！　語学スクールに恋人を探しに来る人。そりゃ、はじめは本気で言葉を学びますよ。でも、グループでいろんな人と会話すると、出会いの場にもなるんですよね。講師を好きになっちゃって、本気で口説く人もいるし」
「そうなんだ……でも、私はフランス語だからなぁ」
　英語と違って、フランス語は日常で必要となる場面が少ない。だから学びに来るのは仕事でどうしても必要があるなど、学習意欲の高い生徒しかいなかった。
「でも、最近噂になっていますよ」
「噂って？」
「フランス語に美人の先生がいるって。最近、プライベート・レッスンの問い合わせが多くて」
　先生と生徒、一対一で行うプライベート・レッスンはグループ・レッスンに比べて料金が高い。基本的にグループでの受講を推奨しているから、美玲はまだ受け持ったことがなかった。
「そうなんだ。一対一って、緊張しちゃいそう」
「生徒さんの方が、美玲先生みたいな美人と過ごせるから、緊張すると思うけどなぁ」
「ちなつさんの思い違いだよ。私、そんなに言うほどモテたことないし」

「美玲先生って、時々自己肯定感が低いですよね」
「そうかなぁ……」
「そうですよ。こんなにも美人なのに恋人もいないなんて、信じられない。もしかして片想いの相手とか、いるんですか？」
そこまで言われるとぐっと黙るしかない。恋人はいないけれど、片想いならしている。
美玲の頭に浮かぶのは、一人の男性だ。アフリカの強い日差しの下、鋭い眼差しで見つめられた。終始緊張感があったけれど、最後に笑った顔を見せてくれた彼。
――一三条誠治二等書記官。
アフリカで出会ってから半年も過ぎているのに、美玲は毎日思い出しては、ため息を吐いていた。
渡された外務省の電話番号にかける勇気はない。かければきっと、あの時の退避日本人として心的相談センターに回されてしまうだろう。そこで一三条の名前を出したとしても「それは吊り橋効果の恋です」と言われるに違いない。
まさしく吊り橋効果だろう。けれど、きっと東京で会ったとしても。
――あんなにも素敵な人だから、絶対に好きになっちゃう……
会って、もう一度話をしてみたい。でも――チラシに載る円の形をした外務省のシンボルを見ると、身がすくんでしまう。

自己肯定感が低いだけでなく……美玲が引け目を感じる理由はもう一つある。
実家にいる母、海鈴（みすず）のことだ。両親が離婚したのは、海鈴の不倫が原因だった。離婚当時、美玲は口論している二人の様子からそのことを知っていたし、フランス人の父はしっかりと説明してくれた。
どちらが美玲を引き取るか、という話になると、男と別れたばかりの海鈴は寂しいから連れていくと言って聞かなかった。美玲も母親から一緒にいてほしいと言われると、愛されていると思い見捨てることができない。
結局、父親に時折面会することを条件とした離婚が認められた。けれど海鈴は美玲を連れて勝手に帰国し、二人で一緒に日本に住みはじめた。父親は突然断りもなく日本に帰った海鈴を許すことができず、連絡は絶たれたままだ。
今の美玲であれば、自ら父親に連絡することはできるけれど……十年以上も離れ、すでに再婚もしている父親が娘からの連絡を喜ぶとは思えない。
日本に帰った母親は、美貌にものを言わせて、付き合う男性をころころと替えていた。さすがに年ごろの娘のいる家に男を連れてくることはなかったけれど、美玲は早く家を出たくて仕方がなかった。
そんな母親を身近に見ていたから、恋愛には消極的になっていた。どれだけ美人だ、綺麗だと言われても自分とそっくりな、奔放すぎる母を思い浮かべ嫌になってしまう。

こんな自分が、外交官の中でもエリートのキャリア官僚である彼を想うことすらおこがましい。思い出は胸にしまっておこうと、美玲は彼から受け取ったチラシを折りたたむ。

――もう、いい加減に忘れなきゃ……

こんなにも一人の男性を想い続けた経験はなかった。恋愛偏差値の低い美玲には、どうにもならない想いの行先を見つけることは容易ではない。

ため息を吐くことしか、美玲にはできなかった。

日々の仕事をこなしながら、休みとなった日曜日。美玲は勤めていた非営利団体の参加するイベントに久しぶりに顔を出すことにした。

都内にある大きな広場で開催され、国内にある主要な非営利団体や国際開発を行う機関が一堂に会するお祭りだ。外務省などが共催しているから、関心のある学生や人々が大勢訪れる。

非営利団体にしてみると、支援者にアピールする大切な機会だから、自ずと準備に熱が入る。フェアトレードの品物を売るブースを用意し、そこでコーヒーを売っていた。

アフリカで栽培されたものを販売しているが、数や品質が均等にならないため市場では流通させにくい。そのため団体が買い取っているけれど、売り上げはそれほど多くない。

それでも、酸味の強いコーヒー豆は一部の支援者には人気が高かった。

一度飲めばその味のとりこになる。職員だった時にコーヒー農園を訪れていたから、美玲は製品が売られているのを見て一安心した。

――本当は、売り子も手伝いたかったけど……

ボランティアとして、これからも関わりたいと思っていた。アフリカの陽気な人たちを知っているから、もっと何かできることをしたい。けれど……

アフリカのことは好きでも、まだ恐ろしい紛争地のイメージが残っている。あの砂埃（すなぼこり）の風をもう一度受ける覚悟がつかない。

しかし、そこに住む人々は皆素朴な人たちだった。乾燥イチヂクをくれたマリアのように、優しく強い女性たちばかりだった。

――また、行きたいなぁ……

いつか平和になった時に、もう一度行ってみたい。

目を閉じるといつでもアフリカの照りつける太陽と、大柄で陽気な女性たちを思い出す。そして、少し日に焼けた怜悧（れいり）な瞳の彼を――

非営利団体のブースにたどり着いた美玲は、顔なじみのスタッフに声をかけられた。

「美玲さん、お久しぶりです！」

「こんにちは。みんな元気そうだね」

美玲はせっかく訪問したからと、コーヒー豆を購入する。これなら、休憩時間に淹（い）れ

ることができそうだ。それに、ちょっとだけ焦げ感の強いローストも懐かしい。
「はい！　コーヒー豆ですね。あ、そういえば藤崎ドクターも来ていましたよ。まだこのあたりにいるのかなぁ」
「藤崎先生もいるの？　じゃ、ちょっと探してくるね」
美玲は会場をぐるりと歩きはじめる。非営利団体といっても、活動内容や規模は様々だ。美玲の働いていた団体のように、海外に日本人の駐在員を置けるところは少ない。小さな団体は小さいなりに得意な分野で支援している。あまり人々に注目されない地域に密着している団体もある。それら一つ一つのブースを見るのも、研修で知り合った仲間に声をかけあうのも楽しみの一つだった。
アフリカで活動している団体のパンフレットを見ていると、後ろから声がかかる。
「おっ、美玲君じゃないか」
「藤崎先生！」
白髭を蓄えた藤崎は、以前と変わらず朗らかな表情をしている。
「元気にしていたか？　そういえば、転職したって聞いたけど」
「はい、今は都内でフランス語を教えています」
「そうかぁ、君はいいパートナーだったけどなぁ」
「そう言っていただけると、嬉しいです」

藤崎は豪快な笑顔を見せつつも、人のいない方へ美玲を呼び木陰に立った。
「どうだ、フラッシュバックはないか？」
「はい、もうテレビでアフリカの映像を見ても、懐かしいとしか思いません」
藤崎は医師として美玲の心の状態を心配していた。恐ろしい体験をすると、どうしてもトラウマとして残ることがある。美玲が団体を辞めたせいもあり、藤崎は責任を感じていたようだ。
「そうか、それなら良かった。で、あれからあの、外交官の彼には会ったのか？」
「外交官のって、一三条さんですか？　いえ」
なぜ藤崎がそんなことを聞くのだろうかと不思議に思い、美玲は首を傾げる。その顔を見た藤崎は「まいったな」と頭をかいた。
「本当に、会っていないのか？」
「……はい」
藤崎は困ったような顔をしながら「いや、余計なおせっかいかもしれないし」とぶつぶつ呟いている。
「一三条さんが、どうかされたのですか？」
「あー、いや。そういえば今、日本に帰国しているみたいだぞ」
「そうなんですか？」

美玲はひと際大きく目を見開いた。総合職の外交官が一つの在外公館にいる期間は三年くらいと聞いたこともあり、彼は日本にはいないとばかり思っていた。

話していると、藤崎を探していたスタッフに声をかけられる。彼は「すまん、また会おう」と言って戻っていった。

溌剌とした藤崎の後ろ姿を見ると、自分もまた何かしたいと思う気持ちが湧いてくる。でも……

美玲は顔を左右に振った。まだ、以前のようにボランティア活動をする気にはなれそうにない。

今はここに来ることができただけでも、一歩前進だ。自分の殻に閉じこもりがちな美玲は、自らを鼓舞するように歩きはじめると、中央に掲げられた看板が目に留まる。

そこには『現役外交官が語る国際協力のホンネ』とあり、外務省ブースとして講演が予定されていた。

――現役外交官、かぁ……

もしかして、と思って眺めていると、美玲は探していた人の名前を見つけてしまう。三番目に登壇するのは、中東アフリカ局の一三条誠治と書かれていた。

「一三条さんが、いる」

何度も思い出していた彼が、この場所にいる。アフリカにいると思っていたのに、藤

崎の言う通り日本に帰国していた。

――会いたい。ほんの少しでいいから、もう一度会いたい。

時計を見ると、すでに講演がはじまる時刻になっている。考える間もなく、美玲は走り出した。

野外に設けられた会場には、熱心に聞く人もいれば、単に立ち止まって雑談している人もいる。

壇上に上がって話しているのは、日に焼けた精悍な顔つきをした彼だった。

――いた！　あそこに、本当に一三条さんがいる……！

マイクを通じて聞こえる彼の低いバリトンの声。アフリカにいた時は無造作に伸びていた髪が、今は切り揃えられ後ろにキッチリと撫でつけられていた。

何よりも三つ揃えのスーツ姿が眩しい。白の細いストライプの入った紺色のジャケットに、ウェストコート。皺のない白のシャツにえんじ色のネクタイを締めている。日本では少し主張が強く感じる色合いだけれど、アフリカではよく見られる組み合わせだ。

――スーツ姿も、素敵！

彼の雄姿から目が離せない。壇上にいる一三条には、美玲のことはわからないだろう。当時は後ろで一つに縛っていた髪を今日は下ろし、くるりと巻いている。あの時は日焼け止めだけの素肌をさらしていたのに、今日はしっかりとアイメイクもしていた。

服装だって、アフリカにいた時は長袖シャツに綿のパンツと地味だったけれど、今日はAラインのロングスカートをはいている。トップは黒のニットで、大ぶりな木のネックレスを重ねづけしていた。

だから、きっと自分がここにいるとは思わないだろう。印象が違いすぎるし、あの日は全てが混乱していたのだから。

――でも、こうして元気そうな顔を見ることができて、良かったなぁ……

彼は時折砕けた口調で、難しいテーマでさえもユーモアを交えて話している。最後に質疑応答の時間を迎えると、子どもの素朴な『アフリカって遠いですか?』という質問にも、丁寧に『遠いかもしれないけど、僕の心は近いよ』と答えていた。

――はぁ、やっぱりかっこいい……

司会をしている女性の声が、上ずっているような気がする。一三条がかっこよすぎて、緊張しているのかもしれない。

そんな妄想同然のことを考えていると、講演の終了する時刻が近づいてきた。いつまでも彼を見ていたいけれど、一三条は忙しいに違いない。この後も、現役外交官だからきっと仕事が待っているのだろう。

もう行かなくちゃ、と美玲は立ち上がった。お尻についた汚れを払ったところで――

「美玲さん、待ってくれ!」

壇上から、マイクを使って一三条が声をかけた。

「――!」

振り返ると、一三条が「すみません」と司会者の女性に謝っている。そして壇上をひらりと飛び降りると、そのまま美玲の方へ走ってくる。

あっという間に距離を詰めた彼は、美玲の傍に立った。ふわりと清涼感のある香りが漂う。

「久しぶり。元気だった?」

息を乱しつつも髪をかき上げた彼は、別れた時と同じように爽やかな笑顔を、目を丸くした美玲に向けていた。

「あっ、あの……」

突然目の前に立った彼に、何を伝えればいいのかわからず美玲は狼狽える。足を止めた彼女に安心した一三条から「壇上で君を見つけたんだ。良かった、会いたかったよ」と言われ、さらに驚いた。

「会いたかった? 一三条さんが……私に?」

「ああ、君を探したけれど、もう非営利団体は辞めていると聞いて。藤崎先生に確認しても、美玲さんの転職先を知らないと言われて、どうしたものかと思っていたんだ」

一三条はさっぱりとした笑顔で「この後、時間がある?」と聞いてきた。

「はい、今日は大丈夫ですけど」
「良かった、ちょっと待っていて。僕もこの講演が終われば自由になるから」
「はぁ」
彼は責任者に挨拶してくるよと言い、戻っていった。突然のことに驚きつつも、美玲は嬉しさで胸が弾む。
――私に会いたかったって……
いくら恋愛初心者の美玲でも、その意味するところに期待してしまう。男性から誘われた経験はあっても、これほど嬉しいと思ったことはない。夢ではないかと自分の頬をつねると、やっぱり痛い。
「何しているの？」
はっと顔を上げると、急いで戻ってきた一三条が傍に立って美玲を見下ろしていた。彼の甘やかな視線を受け、思わず頬を赤く染める。
「あ、あの……夢じゃないかなって。私も、一三条さんに会いたかったから」
すっと口を滑るように出た美玲の本音に、今度は一三条が目を見開いた。
「それって……期待しても、いいのかな」
「はい？」
目元をうっすらと赤くした一三条は、ふと周囲を見回した。さすがに壇上から声をか

けたため、注目されている。
「ごめん、ここだと人目があるから移動しようか」
「そうですね」
美玲も浮ついた足どりで、彼についていく。薄い鞄を持った彼は、長い脚を交差させて歩いていく。いつもの自分の歩くスピードと違い、速足になる。久しぶりにヒールのある靴を履いていたから、少し歩きづらかった。
「あっ、ごめん」
振り返った一三条は、自分が速く歩きすぎていたことに気がつくと美玲の傍に立ち、項垂れるように頭を下げた。
「歩くスピードが違うの、忘れていた」
「いえ、私も今日は慣れない靴だったから」
「これからは気をつけるよ」
顔を上げた一三条は、今度は手を差し出してくる。今頃握手だろうかと右手を出して握ると「ちがう、こっちの手」と言って左手を握りしめた。
「え」
戸惑う間もなく、手を握って一三条はゆっくりと歩き出す。
――あれ？　これってアフリカの習慣なのかな……

海外生活が長くなると、常識があやふやになることが多い。男性の友人同士なら、手をつないでもおかしくない国もあった。

――いや、やっぱり違うよね？

大人の男女が手をつないで歩くのは、日本では恋人以上の関係だからだ。一三条が忘れているとも思えない。硬く節くれだった手が、自分の手を握っているけれど、手汗をかきそうで焦ってしまう。

けれど、彼の手の熱を離すのが惜しくて、美玲はそのままにして歩いていく。

――いいのかなぁ、いいんだよね。

普段の見慣れたビルの風景が、途端に違うものに見える。彼と出会った場所は、照りつける太陽と砂埃のある赤茶けた大地、砲撃で崩れた建物。まったく違うところだったから、戸惑いが大きい。

何も言わずに歩いていくと、地下鉄の駅の近くにある高級ホテルの入口の前で立ち止まった。

「ここでいいかな」

「あ、はい」

「静かなところだろうし、さすがに盗聴されないよな」

サラッと不穏なことを言った彼は、美玲の手をぐっと引いて中に入る。

高い天井に輝くシャンデリア。重厚で歴史を感じさせるロビーの一画にあるティーラウンジで、向かいあうように二人は座った。一三条は飲み物を頼み、美玲も同じようにコーヒーを注文する。

「久しぶりだね」

目を猫のように細めた一三条が、美玲を柔らかく見つめる。長い脚を組んだ彼は手を膝の上に置いた。

忙しいだろう彼が、こうして一緒に過ごしてくれるだけでも嬉しくなる。聞きたいことはたくさんあるのに、胸が詰まり美玲は何も言えなくなった。

「日本はやっぱりいいね。どこも安全だ」

しみじみとした声で語る。あの危険な時を一緒に過ごしたから、その言葉が身に染みる。あの後、彼はしばらくアフリカにいたのだから、より実感しているだろう。

「一三条さんはいつ日本に戻ったのですか？」

「僕？　僕は辞令が下りて帰国したのは、二週間前になるかな」

「二週間……だったら、まだ帰ってきたばかりですね」

そうだね、と形の良い口元を上げた一三条は、コーヒーカップとソーサーを手に持った。その仕草は美しくて、まるで映画を観ているようだ。額にはらりとかかる前髪に、凛々(りり)しい眉。まつ毛が目に影を落としている。少しこけた頬に鋭い眼光は、男らしさを増し

ていた。

細身でありながらも均整の取れた体躯を、上質な生地のスーツが包んでいる。力強い瞳は、絶対に狙った獲物は逃さないと言っているようだ。

――ホント、凄くかっこいいんだから……

ほう、と浅く息を吐いた美玲がサーブされたコーヒーカップを持って口に含むと、豊潤な香りが口中に広がる。

「美味しい」

「そうだね、日本のコーヒーは焙煎しすぎていなくて、いいよね」

「そうでしたね。アフリカの人って、どうしてあんなに炒ってしまうんでしょうね」

豆は美味しいのに、なぜか炒る時間が長かった。なのでどうしても苦くなる。何度も「もったいない」と感じつつも、これが彼らの好む味なのかと思い黙っていた。なるべく現地に合わせようとしたけれど、馴染めなかったことも多い。

「お疲れではないですか？」

「うん、疲れていたけど、橋渡さんの顔を見たら元気になったよ」

「――！」

思わず飲んでいたコーヒーが変なところに入りそうになる。ぐっと喉を詰まらせながら、美玲は目の前にいる一三条をそっと見上げた。

立ち読みサンプル
はここまで

「あの……さっきから不思議なのですが、私のことを探していたとか」

「そうだよ。また会いたかったのに、君から連絡を貰えなくて落ちこんでいた。もちろん安全管理部門は把握しているだろうけど、個人情報だからアクセスできなくて」

一三条はカップをローテーブルに置くと、組んでいた脚をほどき身体を前のめりにさせた。

「帰ってからは、大丈夫だった？　あれだけストレスのかかる体験をしたんだ、何か不調があってもおかしくない」

「帰ってきた後は、ちょっと寝込むこともあったけど……今はもう、大丈夫です。語学スクールに転職して、フランス語を教えています」

落ち着いて答えた美玲は、少しだけがっかりした。やっぱり彼にとって自分は、単なる保護した邦人の一人だったのか。

でも、さっきから美玲を見つめる視線を熱く感じるのは、気のせいだろうか。

「そっか、フランス語を教えているんだね」

「はい」

「僕も学びに行こうかな」

美玲はコーヒーカップを置くと、動揺していたのかカチャリと器の重なる音がする。

「あの、一三条さんは十分堪能ですよね。英語もフランス語も」